

## マデイラワイン、何世紀にもわたる歴史

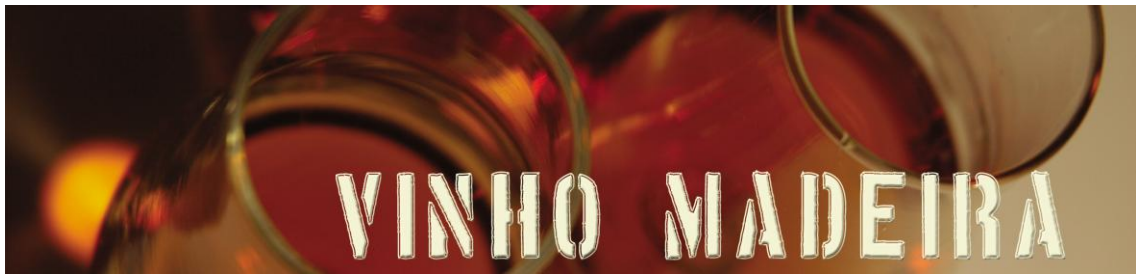
マデイラ島は、1419年、ポルトガルの大航海時代の黄金期に、ジョアン・ゴンサルベシュ・ザルコ、トリスタン・ヴァシュ・テイシェイラ、バルトロメウ・ペレステレロに発見された。ヘンリケ王子の指揮のもと、三人の世襲領地の君主たちは領地を授かり、すぐに開墾を進め、この島の土地で、小麦、ブドウ、サトウキビを栽培し始めました。

初期の植民地建設者たちは、ポルトガルで貴族に属する人達で、労働者達、職人達をポルトガル北部から、この開発の初期の数年に、この島を開拓した者に特権を与える条件で、島に連れて来ました。早くから、重要な輸出市場とのつながりを利用できるマデイラの潜在力をわかっていた、ヨーロッパの大事業者らも同様に扇動しました。

島の植生の濃度の高いため、広大な面積を焼き払うことを、余儀なくされ、このためさらに肥沃になりました。1461年まで、植民地化の初期の数年間にすでに、最初の水路のシステムが建設され、その後何世紀もかけて、徐々に拡張されました。

農業は、特に砂糖の栽培で成功しました。しかし、それはブドウや小麦についても同様でした。1466年には、砂糖は、主要な作物となり、輸出される以外にも、ポルトガル本土にも輸送され、ケニアなどアフリカの市場、地中海や北ヨーロッパの市場にまで拡大するに至りました。

最初のブドウの木がいつごろ植えられたのか、はっきりとは分かっていませんが、初期の植民地建設者たちが、ミーニョにあった品種を持ち込んだといわれています。しかしながら、ルイーシュ・ド・カダモストの名で知られる、ベネチア人航海士アルビス・ダ・モストの1450年付けの歴史記録で植民地化の初期に、マウヴァジア・カンディダの品種が導入されたことが明示されています。航海士は、《…様々な品種がある中で、ドン・ヘンリケは カンディア（クレタの首都）から送られ、よく成長してい



るマルバジアを植えるよう命じた。…》と記述し、旅行日記の中で、ワインの輸出とその品質について賞賛しています。

これらの記録は秀逸で、驚いたことに、植民地化が始まって 25 年後にはマデイラワインの輸出が既に現実となっていたことを明示しています。

15 世紀に、輸出の増加、否、疑うべくもなくクリストヴァン・コロンボによるアメリカの発見という、マデイラワインの歴史を決定的に左右した出来事を背景に、ブドウの栽培面積は拡大されました。

この時期に、マデイラワインが外国では既に知名度が高かったことを物語る、歴史上の重要人物が関わったエピソードが語られています。イギリスの王様、エドワード 4 世の兄弟であるクラレンス公ジョージは、1478 年、反逆罪で死刑を宣告され、マルバジアワインの樽での溺死を選んだことが叙述されています。

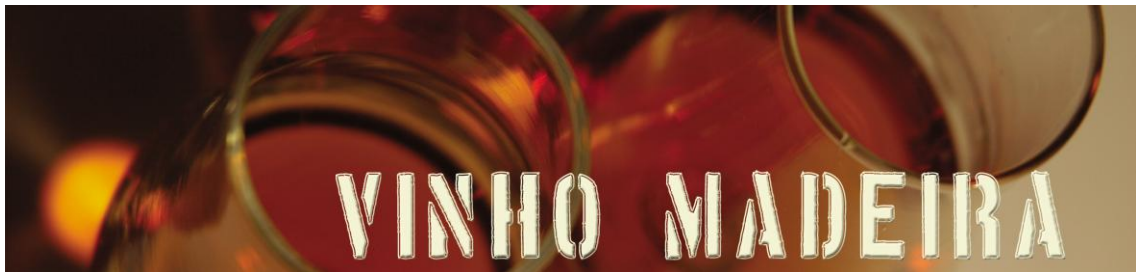
## 16 世紀

16 世紀は、過剰生産と土壌の疲弊など様々な要因から、島での砂糖きびの栽培が減少し始めます。16 世紀末に、格段に安い価格を提示するブラジルの砂糖という競争相手が登場し、難局は決定的となります。砂糖栽培に使われていた土地は、ぶどう園に転向されました。マデイラには、その頃も外国人の開拓者たちが到着していました。マルバジア・バルボーザの品種を導入したシモン・アシアイオリもその一人です。

16 世紀を通じて、ベネチア人のジウリオ・ランディ、イタリア人のポンペオ・アルディティクなど、島を訪れた人達がマルバジアについての証言があります。ジウリオは、《島中で、大変美味で、カンディアのマルバジアに類似すると評価されている大量のワインを生産している。》と言及しています。

## 17 世紀

17 世紀を通じて、マデイラワインの生産・輸出は大きく増加し、あの時代に輸出が三倍に増加したと推測されるに至ります。外国の輸出業者がの大半で、この分野にお



けるイギリスの影響力が絶対的であったのは、イギリスの商人たちが発効した商業権によって、アメリカ植民地の市場が発展したことから明瞭です。

このような権利は、インドやアメリカとの商取引において、島に居住するイギリス商人たちを特権的な立場にしました。これらの市場は、それまでマデイラワインの最大の市場であったブラジルを大幅にしのぐに至りました。このようにマデイラ、新世界、ヨーロッパ（特にイギリス）三角貿易が始まりました。この三角形には、ポルトガル植民地とイギリスに戻ってくるイギリスの資産の輸送も含まれます。

## 18世紀

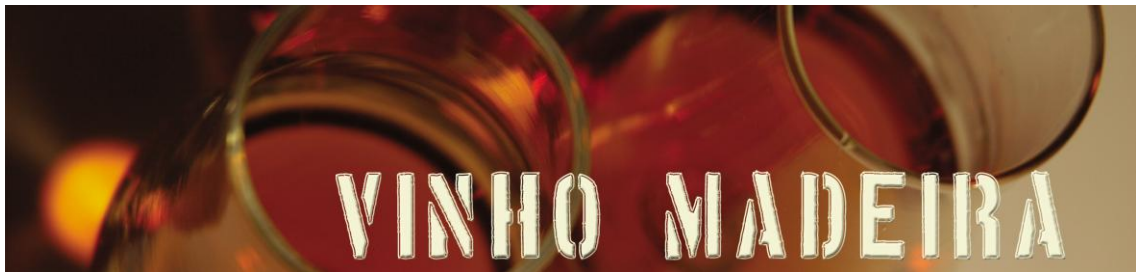
この世紀はイギリスとポルトガルの間で交わされたメシュエン条約(1703年)と共に始まりました。ポルトガルのワインはイギリスに入るのに他国産のワインよりも3分の1少なく関税を払う、イギリスの繊維は全く関税を請求されないという、この方策は、ポートワインについては予定通り恩恵を与えましたが、マデイラワインの輸出は主にインドと北アメリカに主流のままでした。ヨーロッパへの輸出は二番手でした。

マデイラワインとアメリカの結びつきは、非常に強く、この近接さは、1776年7月4日のアメリカ合衆国の独立宣言の祝うに当たって、初代大統領ジョージ・ワシントンがマデイラワインの杯で祝杯を挙げた事実が証明しています。

ヨーロッパの宮廷の、より上品なテーブル上り、王様、皇帝、政治家のお気に入りのワインでした。トマス・ジェファソンも他のすべての《建国の父たち》のように、当時もっとも洗練されたワイン愛好家でしたが、マデイラワインが大のお気に入りでした。

この時期のマデイラワインの人気の高騰は、マイナスな結果をも、もたらずに至りました。島の北岸でよく、高品質のワインが質のあまり良くないワインと混ぜられたり、他の地域では、偽造されたマデイラワインが市場に出回り始めたりしました。この世紀の間、ワインの品質を保持するため、厳格な規制の制定・導入に向け努力が注がれました。

マデイラワインの著名さと名声について語る他に、18世紀を通じたこの時期に、ワインの性質の発展について言及するのは、特に興味深く有益です。酒精強化と加熱処理という、二つの新技術の導入はこの向上に貢献しました。18世紀中頃には、ほと



多くの製造会社がワインの酒精強化を始めています。酒精強化は、初期には、商業上の機密の一種であったかもしれませんが。クックの最初の世界一周旅行の際、その無名の旅行作家の一人が、《一般に、こういったワインには、いかなる蒸留飲料も添加されないと断言されているが、反対に、この目的で、間違いなく、アルコール飲料が使われているのを目にした、と私に断言した者たちがいた。》と言及しています。

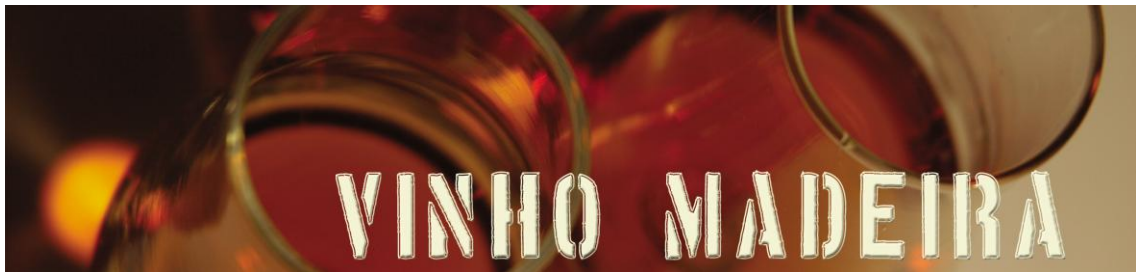
興味深いことに、18世紀末には、おそらく多くのイギリス人が本国に戻るようになったアメリカ合衆国の独立戦争が起きたことにより、市場ごとの輸出の割合は変化し、イギリスの市場が、徐々にマデイラワインの輸入で最大の規模を持つにいたりました。

### 19世紀

19世紀の初頭は、ナポレオン戦争により輸出がインフレとなり、《ブーム》は強まります。しかし最終的には、マデイラワインにとって有利な世紀とはなりませんでした。この世紀が始まりすぐ最初の10年の戦後の低迷は、マデイラワインにとって不利に働き、輸出が大きく減少します。それまでフランスとスペインの港が閉鎖されており、ポルトガルのワイン競争相手なしに、イギリス市場に入っていました。これらの港が再び開港したことも拍車をかけました。

戦後のこの時期に関係する多くの出来事のうち、興味を引き続けるのは、マデイラのイギリス領事、ヘンリー・ベイチによって伝えられた、1815年にナポレオン・ボナパルトが、流刑地サンタ・ヘレナ島へ向かう途中に、島を通過した際、マルバジアー樽を皇帝に贈ったことです。話の続きは、マデイラワインを流刑の辛酸の解毒剤とすることを、皇帝は拒み、貴重な美酒の入った樽はマデイラ島に戻り、提供者の要請で1840年に数百本の瓶に詰められ、無数のイギリス人を大いに喜ばせました。そのうちのひとりとなったのが、ウインストン・チャーチル卿で、1950年にマデイラを訪れた際、そのワインを味わう幸運に恵まれました。

1861年に内戦が勃発し、北アメリカの不安定な状況は、あの方面へのマデイラワインの輸出に劇的に影響を与えます。そして、イギリスで戦後にマデイラワインが流行するにもかかわらず、アメリカ市場の縮小を埋めるのに十分ではなかったというのが事実です。輸出において起こった変化に影響を与えることとなった他の要素としては、特にスエズ運河が1869年に開通し、西側に向かう船舶がマデイラ島を通過しなくなったことです。



19世紀の半ば、ロシア市場が拡大、活気づきます。この市場は、一定の期間中、取引量においてイギリス市場のライバルとなります。

しかし、19世紀の後半は、破壊的な病気の威力がブドウの木を脅かします。ウドンコ病とフィロキセラです。

この期間、フィロキセラに対処する手段としてアメリカのブドウの木が増えたにもかかわらず、マデイラワインの生産の大部分はヴェルデーリョ、ティンタ・ネグラをベースとし、ブアル、バスタルドとトハンテシュも豊富だったことが伝えられています。マルバジアのブドウから作られたワインは、大いなる名声と、もともとはイエズス会宣教師たちによって、もたらされたファジャ・ド・パドレシュの神話的なマルバジア・カンディダに由来する品質を保ちながら、引き続き少量がつくられていました。

多くの危機にもかかわらず、マデイラワインの生産と流通は回復し、将来を見据えながら市場に健在でした。

## 20世紀、21世紀

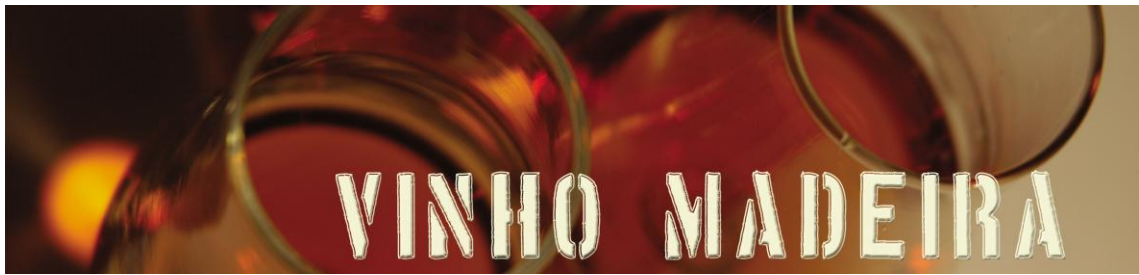
20世紀はマデイラワインにとって、前世紀よりも比較的安定していました。この世紀の最初の10年から大戦まで、輸出市場では、ドイツ市場が第一番目の輸出先として台頭しました。しかし、二つの大戦の間の時間に、マデイラワインの主要な輸出先に、幾分変動が見られます。スカンジナビアの市場、とくにスウェーデンとデンマークが上質のマデイラワインの消費国として登場します。

この世紀は同時に、マデイラワインの品質保持のために規制を設ける努力がされ、また、マデイラワインの製造する企業の組織のシナリオを完全に変えた、数多くのポルトガル、イギリスの製造企業間の合併という出来事がありました。

80年代以降、輸出市場の傾向がはっきりし始め、今日に至るまで大きく変わりません。

1974年の革命、そして後のヨーロッパ共同体への加盟は、地域に、ブドウ・ワイン製造業の分野にインパクトを与え、発展をもたらしました。一方、品質向上管理の強化が、政治的にも優先事項の一つとなり、他方、ブドウ・ワイン製造業の異議ある健全な進歩も経験しました。

21世紀は、500年歴史を持つワインの品質向上の強化とともに始まりました。今



日、ブドウ生産者とマデイラワインの製造と流通にかかわる企業の団体は、ブドウの木の植樹から、ワインの瓶詰めまで、世界で最も優れたワインの一つという、名声と威光の保持に貢献するため、このワインの品質のコンスタントな向上のために弛みない努力をしています。